

「大悲呪」の違い探る

臨黄・曹洞3宗派

僧侶ら実演も

花園大で禅宗法式シンポ

臨済宗妙心寺派教化センターと花園大国際禅学研究所は6日、京都市中京区の同大教室で、第2回禅宗法式シンポジウム「千手観音への祈り ナムカラタンノーの世界」を開いた。臨済、曹洞、

黄檗の3宗派の僧侶ら約150人が聴講した。昨年の第1回シンポは「開山忌」がテーマ。今回は「ナムカラタンノー」という出だしで知られ、主に禅宗で唱えられ「大悲呪」を取り上げ、3派での用い方の違いなどが紹介された。大悲呪の概説と臨済宗での法式を同研究所の野口善敬所長（妙心寺派教学部長・教化センター所長）が担当。

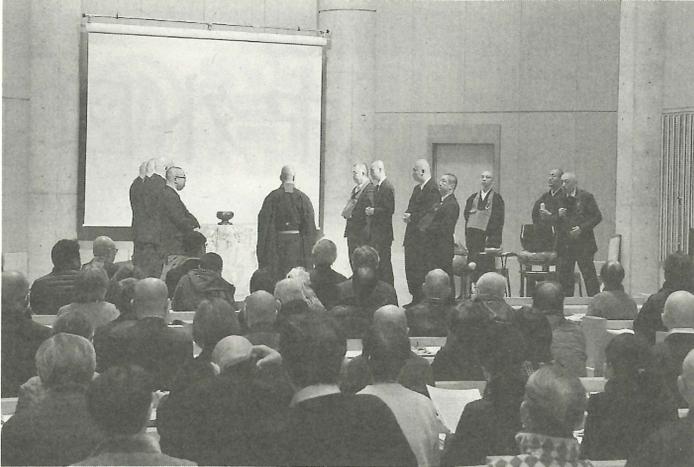
日本に伝来して禅宗を中心唱えるようになったことなど歴史や功德について詳述した。

一方、曹洞宗総合研究センターの尾崎正善講師は「唱える回数は臨済宗ほどではなく、曹洞宗では大悲呪を千手観音のお経だと理解して唱えてい

る人は少ない」とした。坐禅修行を基本に日常生活全般を行とし、特定の経典等の参究を否定的に捉えていたためではないかとその理由を説いた。また、国際禅学研究所客員研究員で、黄檗宗の宗会議員・教学研究委員の村瀬正光氏は、木魚を使って唱えることや、大悲呪だけを単独で唱えることがないなど臨済宗との違いを紹介し、「隠元禅師の時代まで400年の間に中国で何らかの変革があったのではないかと推測した。

シンポジウムでは3派の僧侶が登壇してそれぞれの大悲呪を実演。留学生が音楽のような節の中国式「大悲呪」を披露し、最後に木魚を用いた大悲呪を全員で唱えた。

「大悲呪」を実演する曹洞宗の僧侶ら



「ナムカラタンノー」という出だしで知られ、主に禅宗で唱えられ「大悲呪」を取り上げ

され、天平時代の初めに

(河台清治)